

さいたま市内における近代和風建築に関する研究

—町屋型民家と農家型民家の比較及び農家型民家の発達について—



AK13011 池田 光世

Keywords

町家型民家 農家型民家 酒造
家相図 間取り類型 個室化

1. はじめに

1.1 研究目的と背景

今年度調査を続けてきたさいたま市内には数多くの近代和風建築が残されており、その土地柄や活用用途によって異なる造りになっている。

日本の伝統的な住宅の形式には、町屋型と農家型という大きな二つの系統があり、それぞれ異なる特徴がある。

本研究では、前段として、さいたま市内における同じ酒造業を生業とする、町屋型の民家と農家型の民家の比較・考察を行う。また後段として、さいたま市内の農家型民家が、江戸時代から近代にかけてどのように発展してきたか変遷をたどる。

1.2 研究方法

(1) 町屋型民家と農家型民家の比較【前段】

- ① 町屋型民家は岩槻の中野家を、農家型民家は浦和の内木酒造を対象とし、岩槻と浦和についての歴史的文献を調べ、基本的な知見を得る。
- ② 各建築物の実測調査及び文献調査
- ③ 以上より同じ酒造業営む両者の比較・考察をする。

(2) 農家型民家の発達【後段】

- ① 『埼玉県の民家』から文献調査を行う。
- ② 江戸時代末期の民家として岩槻の加藤家を対象とし、実測調査及び文献調査
- ③ 近代の民家として浦和の内木酒造と山崎家を対象とし、実測調査及び文献調査
- ④ 以上よりさいたま市内の農家型民家がどのように変化してきたか考察を行う。



図1 さいたま市 調査対象民家位置

表1 調査対象民家一覧

名称	種類	所在地	調査日
1 山崎家	農家	さいたま市浦和区大東3-19-18	7月7日
2 松本家	町屋	さいたま市中央区本町西4-1-14	7月13日
3 武川家	町屋	さいたま市中央区本町西3-1-32	7月13日
4 鈴木家	町屋	さいたま市中央区本町1-12-19	7月26日
5 内木酒造	農家	さいたま市桜区西堀6-13-15	7月27日
6 中野家	町屋	さいたま市岩槻区本町2-1-32	7月30日
7 江野家	町屋	東松山市本町1-1-7	9月12日
8 加藤家	農家	さいたま市岩槻区本町古ヶ場68	10月13日

2. 町屋型民家と農家型民家の比較

2.1 町屋型民家について

町屋型とは京都などに見られる都会型住宅の形式であり、可能な限り多くの建屋を道路に面して建設するために、間口が狭く奥行きが長い建屋にする必要がある。

2.1.1 岩槻について

江戸時代まで岩槻周辺には利根川、荒川などの大河が流れ、また東北地方に通じる主要な街道が通るなど水陸交通の要衝であり、現在では主に田畑等の農地として利用されており、稲作を主体とした田園が形成されている。

2.1.2 中野家住宅

平成6年に酒屋をやめたとされており、平成21年から藤宮製菓は中野家の店蔵を造り、現在の場所で営業している。

1861年(文久元年)の家相図が現存し、現在の平面図と比較すると、規模も間取りもほぼ一致し、酒造や蔵などの位置を占めていることが分かる。(表2)



写真1 中野家外観



写真2 中野家家相図

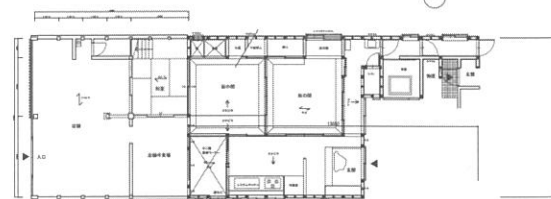


図2 中野家 1階平面図

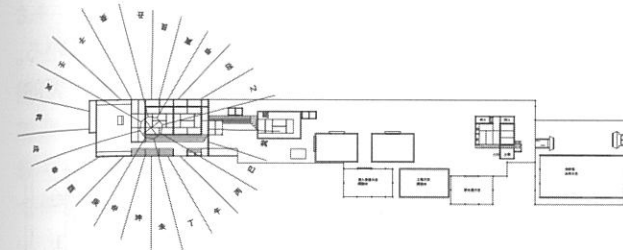


図3 中野家 家相図

表2 家相吉凶図

北	壬子	納屋、物置き吉。浴室、便所、台所、支障なし。
	癸丑	便所、その他不浄物、凶。
表鬼門	寅	食料品など貯蔵は吉。不浄物支障なし。
	卯	門、入口、玄関、凶。張出し、凶。
	辰	便所、凶。別棟、凶。
東	巳	井戸、台所、浴室、吉。門、入口、玄関、吉。
	午	母屋より高い建物凶。開放的にすれば吉。
	未	井戸、台所、浴室、便所、吉。欠込み、凶。
東南	申	門、玄関、大吉。母屋より高い建物凶。
	酉	浴室、便所、凶。大きい張出し、凶。
	戌	不浄物支障なし。倉庫、蔵、大吉。
南	亥	泉水、池、凶。庭園、吉。門、玄関、大吉。
	子	浴室、不浄物、凶。
	丑	泉水、池、凶。火の元、凶。庭園、吉。
裏鬼門	寅	不浄物、凶。張出し、凶。
	卯	便所、凶。張出し、凶。
	辰	欠込み、凶。倉庫などの別棟吉。
西	巳	便所、支障なし。出入口なければ吉。
	午	床の間、神棚、仏壇、吉。
	未	不浄物支障なし。欠込み、凶。
北西	申	神棚、仏壇、吉。倉庫、蔵、大吉。
	酉	浴室、便所、台所、大吉。張出し、吉。
	戌	居間、主寝室、大吉。倉庫、蔵、大吉。

2.1.3 中野家住宅リノベーション前復元

文久の家相図のほか明治の家相図も残り、奥行が約37間もある深い敷地をどのように利用していたかを知ることができる。近年行われた改築も伝統建築に基づいてよく活用されている。リノベーション前は店舗と住居の間に建具が存在したが今現在は壁でふさがれており、店舗と住居間の往来がしにくい造りとなっている。

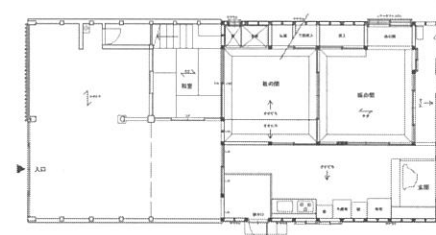


図4 中野家住宅 リノベーション前復元図

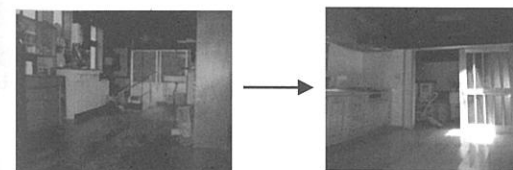


写真3 リノベーションによる変化

2.2 農家型民家について

敷地内に納屋・蔵・作業舎・畜舎・堆肥舎・便所・カマヤ・隠居屋などの附属建物が主屋と一体となって存在し、日常生活の場ならびに生産の場となっている。

農家の施設の種類や規模の特徴はその地域の農業形態と関連し、家族構成差異などによって、附属建物の種類および規模は地域によって特徴をもつ。

2.2.1 浦和について

江戸時代に中山道が江戸と京都を結ぶ重要な道路として整備され、浦和は本陣や問屋がおかれ、宿場町として繁栄した。

浦和は古来より水に恵まれた都市で、平坦な地形を活かして、戦前までは農業も盛んに行われた。農地は大幅に減っているが、荒川沿いには田園が多く残っている。

2.2.2 内木酒造

1776年に創業し、農業をしながら酒造りもおこなっていたが、戦後は酒造業にしぼり、以来浦和唯一の酒蔵として、200年以上の歴史を歩んできた。

建築年月日は明治6年とされており、平成20年には内装や屋根の改修が行われた。南東に接続する離れは、大正11年(1922)の家相図が残り、土蔵のクラノマエを壊して続き座敷との離れを作成したことがわかる。

埼玉県の伝統的な住宅で特徴となるのは、通常座敷の裏側に置かれる納戸が「裏部屋」として発達していくことである。内木酒造では2世帯の夫婦が離れと主寝室を各々使用していて、現在納戸が主寝室として使われている。



写真4 内木酒造外観



図5 内木酒造 配置図



図6 内木酒造 平面図

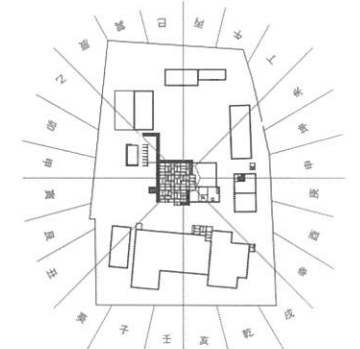


図7 内木酒造 家相図

2.3 考察

以上の結果とそれぞれの家屋の配置図を比較すると、表2のようにまとめられる。図2・6の平面図及び図3・5・7の家相図及び配置図を比較すると、同じく酒造業を営んでいても、表3のように、町家型と農家型では配置形態や住居形態に違いがあることが分かる。

また、現在中野家にはないが、内木酒造には酒蔵が主屋北側に存在している。

表3 研究(1)調査結果

	中野家	内木酒造
都市名	岩槻	浦和
都市類型	町屋型	農家型
●配置形態		
短冊型	○	×
南面性	×	○
面路性	○	×
●住居形態		
主屋類型	土蔵+1列2室	整形六間(梁間3室)型
土間形式	通土間	梁間通土間
単位空間	店蔵・茶の間・座敷	みせ・仏間・座敷

3. 農家型民家の発達

農家型の民家では、田の字型に配置された客間や居間といった各部屋が襖で仕切られ、冠婚葬祭など多くの人が集まるときは、襖を外して各部屋を一続きの広い空間にして利用していた。

本研究では、江戸時代末期：岩槻の加藤家、近代：浦和の内木酒造と山崎家を対象とし、それぞれの間取りの分類を行い、時代を経てどのような変遷をたどってきたかを考察する。

3.1 加藤(幹雄)家住宅

主屋は安政6年(1859)頃完成したとされており、主屋は桁行11間半、梁間7間半の木造2階建、南面した寄棟造である。現当主は昭和47年7月に馬屋上の下男部屋を改造して私室とし、二人の姉は納戸手前の部屋を用いた。

北西の隅にある西の寝室には奥行1尺半の物入れがあるが、ここは元々客間の奥行3尺の床を、その半分を寝室のために物入れに改造したものである。この部屋は現当主の曾祖父(大正11年没)が後妻のために改造したと伝えられており、近世の納戸から近代の寝室へ改造されたものとして注目できる。



写真5 加藤家外観



図8 加藤家 平面図

3.2 山崎家住宅

建築年月日は資産税台帳より明治40年頃とされている。昭和54年頃には土台所や風呂場が設置され、主屋や裏部屋は平成12年頃にリフォームされている。



写真6 山崎家外観



図9 山崎家 1階平面図

3.3 民家の間取り類型

『埼玉県の民家』によると県内の近世民家は、①古四間取②三間取広間型③四間取④四間取裏部屋付⑤六間取の5類型に分けられる。間取り別に事例を挙げて概要をまとめると表4のようになる。

表4 埼玉県の民家 間取り分類

①古四間取 例：高麗家(17世紀初め)	
	間取りの中心に広い室があり、その室は中世上級住宅の居間や会所などによく見られ、最上層民家に広まっていたとされる。
②三間取広間型 例：新井家(18世紀初め)	
	土間に沿って表から裏まで通った広い室を取り、その奥に二室設ける。全国的に最も広まった型であり、間取りの上でも構造の上でも安定した型である。
③四間取 例：宇野家(18世紀中頃)	
	床上部分を田字型に割った間取りであり、幕末期民家の主流である。土間沿いの二室は土間境に開放され、前後二室の間仕切りに建具を入れ、床上部分の座敷化が進んでいく。
④四間取裏部屋付 例：加藤(憲治)家(19世紀初め)	
	四間取の裏に比較的幅の狭い室を設け、六間取同様に最上層民家に見られる間取りである。
⑤六間取 例：飯島家住宅(19世紀半ば)	
	三間広間型の妻側に二室増やした大規模な広間型であり、表側の客座敷と裏側の納戸も二室横に並ぶ。

3.4 考察

古四間取は一部の地域で古い時期に分布し、三間取広間型は古四間取同様に古く、17～18世紀にかけての主流であった。四間取は広間型から生まれ、18世紀中頃から後半にかけて成立したもので幕末の主流となった。そして幕末の最上層民家には四間取から発展して、後ろに狭い二室を設けた四間取裏部屋付、及び、横に二室設けた六間取が現れた。民家の間取りには時代ごとに徐々に異なる主流があったことが分かる。

その後の流れで今回の調査対象である3件の民家は建てられた。結果は表5のようにまとめられるがそれぞれの主屋類型には変化はあまり見られない。だがいずれも上層民家として保存・活用されているものであることが読み取れる。

加藤家・山崎家の明治期(推定)の改造で示されたように、近代にかけて閉鎖的な納戸は、開口部を設けた日中も過ごせる居室へと変化していった。なお、内木酒造は当初よりこの形態であったことが分かる。

また、敷地内に離れを設け、世代ごとの主寝室を用意する事例は近世からあるが、3家とも離れや新居を敷地内に建築している。内木家は家相図により計画が明確に分かる。

戦前まで農村の暮らしは自給自足で、生活環境よりも生産環境の方が重要視されていて、住宅は農作業の場であり、現在のような就寝分離は行われていなかった。戦後になって政府による農家の生活改善に向けた対策がとられ、衛生的な問題から、土間の炊事空間は床上化され、馬屋や作業小屋は母屋から分離される形となっていった。さらに、加藤家に見られるように、それまで使用されていた下男部屋などは、使用人との同居がなくなったことにより、子供部屋へと改造されていった。

伝統的な民家を構造的に見ると、床上部分と土間部分から成っていた。現代にかけて、床上部分における伝統的な床座の生活様式と土間部分における近代的な椅子座の生活様式が共存するようになった。

表5 研究(2)調査結果

都市名	加藤家	内木酒造	山崎家
●建築年代	岩槻	浦和	浦和
●住居形態			
主屋類型	六間取	六間取	四間取裏部屋付
土間形式	通土間	梁間通土間	通土間
単位空間	客間・仏間・座敷	みせ・仏間・座敷	座敷・仏間・寝室

4. 結論

前段の【町屋型民家と農家型民家の比較】では、以下のことが結論付けられる。

① 住居空間と接客空間の分離

同じく酒造業を営んでいても、町屋型民家では短冊形に住居空間と店舗が分かれており、農家型民家では住居と接客空間が混在している。配置形態の違いから、生活の違いが伺える。

② 家相図による間取りの再現性

いずれも家相図により方位の吉凶を占い、間取りや付属建物の配置を決めている。

後段の【農家型民家の発達】では以下のことが結論付けられる。

① 納屋の開放

近世から近代へと移り変わり、就寝・収納のみだった閉鎖的な納戸の開口部が変化し、居室化していく。

② 世代ごとの主寝室を準備

生活環境の向上に伴い、離れや新居を設けることによって、世代ごとに主寝室を分けた。

③ 子供部屋の準備

近世から近代、現代へと移り変わり、使用人が同居しない形態へと変化し、下男部屋などを子供部屋へと改造する事例がある。

④ 現代化する生活様式

戦後の個室化に伴い、伝統的な床上部分での生活と現代的な土間部分での生活が共存していくようになる。

5. おわりに

埼玉県における町屋型民家及び農家型民家は、その地域や時代に合わせて徐々に形を変えていった。さらに住宅の内外表現が多様化する時代へと移り変わってきている現代において、今回調査したような伝統的建築物が衰退してしまわないために、今後も伝統的建築物の保存・活用に向けた研究がされていくべきだと考える。

参考文献

- 1) 埼玉県の民家
- 2) 日本の民家／今和次郎／岩波書店
- 3) 内木酒造株式会社 HP
- 4) 「日本農家の建物構成と配置方式」／日本女子大学／佐藤甚次郎
- 5) 「千葉県の民家における空間分析的研究：江戸時代から戦後の昭和時代まで」／ウォンパヤット ワリチャー、鈴木博之
- 6) 「土間生活の推移について 山形県山形市本沢地区の場合」／山形大学 金子幸子
- 7) 「日本農村の変容と建築学における計画研究課題の変遷ー農村住宅の研究を中心にしてー」／大阪市立大学生活科学部 富樫 顕